

2/7(土) まいど/倫理です。昨日徳島県で震度5の地震があったが、3/4強固でも感じ  
 ました。いつまでも柔らかな心願です、心の準備だけはしておきたい。お祈りね。  
 絵子に乗っている時が来るかと思え、心と息を止めた人だらうかに  
 思う時があります。息を付けた。ものごと。

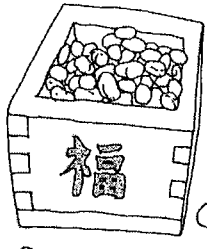
今週の倫理 911号 2015.2.7~2.13

二月のテーマ 本(も)を忘れず

# 元点にかえれ!

丸山竹秋  
 七半世遊がアホ一馬

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋(一九二一・一九九九)のこ  
 とばを掲載します。



え・古屋智子

**い** つも奇抜な方法ばかりを考  
 えたり、派手なやりかたに  
 うつつをぬかしたりでは、ほん  
 うの力を身につけることにはなら  
 ない。またいつもその日だけのこ  
 と、その時だけのことなどを断片  
 的にやるだけでも、実力にはなら  
 ない。

地味であるうと、古めかしくあ  
 るうと、はじめを思い、もとにか  
 えつてやるのが、真の力をつけ  
 る。これを元点にかえるという。  
 ふつうには原点と書いてあるよ  
 うだ。原はみなもとという意味だ。  
 岩(厂:がんだれ)の下に泉が湧  
 いている意味だ。元とは、元:こ  
 つ(首、頭)から来ており、はじ  
 めの意味である。どちらを書いて  
 もよいが、はじめとか、もともと  
 とかいう意味を強調するならば、  
 元点とかくほうが適切であろう。

よく創立〇周年というような行  
 事がおこなわれる。質素に、また  
 盛大にそれぞれの向きによってお  
 こなわれるようだが、いずれにせ  
 よ創立当時のはじめにかえり、そ

の時のことを思いだし、どんな気  
 もちでやったのか、目的は何だっ  
 たか、またその時の苦勞は、もし  
 て喜びは:などをあらためて自覚  
 する。これが元点にかえるとい  
 うことだ。

事業でも何でも、時代がすすむ  
 につれて、かえてゆかねばならぬ  
 ことは、たくさんある。旧態依然  
 としていては、とりのこされてし  
 まう。新しいことは、どしどし取  
 り入れるべきだ。だが、創業の精  
 神が忘れられてしまうと、新しく  
 発展しているようでも、ほんとう  
 の力がでなくなつて衰退してしま  
 うか、または、まったく別のもの  
 となり変わる。

元点にかえり、また新たなスタ  
 ートを切る。このくりかえしでや  
 っている、そのつど内容に重み  
 が加わってくる。宙に浮きかか  
 っていた足も地につく。ゆがみかか  
 っていた姿勢も、まっすぐになる。  
 おごらず、高ぶらず、堂々と仕ご  
 とにとり組むこともできる。創立  
 五年、十年、二十年、三十年:と、

いよいよ箱がついてくるのである。  
 国家でも同様だ。建国一周年も  
 よい。しかし年をふるごとに、そ  
 の建国の精神を失わずに、そのつ  
 ど元点にかえつて前進してゆくと  
 き、五十年、百年、五百年、千  
 年、その厚味を加え、深味を増し  
 つつ、いやが上にもその光彩をか  
 がやかせる。

それは国の面積の大小、人口の  
 多少などにかかわりなく、重厚味  
 のある独特の魅力となつてますま  
 す他国の尊敬をうけるようになる。  
 個人でも同様だ。自分自身に何  
 か記念になるようなことが起こつ  
 たとき、それをチャンスに元点に  
 かえるようにする。誕生日などは  
 そのひとつである。この生命が  
 両親を通じてこの地上にあらわれ  
 出た日。その時の記憶はもちろん、  
 さだかではないとしても、自分の  
 生命をこのようにはぐくんできれ  
 た親に、祖先に、そして世話にな  
 った人々に感謝の意をあらわす。  
 生命のもとに感謝するとは、つま  
 り元点にかえることだ。

(月刊『新世』一九七六年十一月号より)

観音寺 任職 先般大夏あせ 社様より有難うございませう。不思議な事があり、又不思議な事あり。渡辺順一